

ACLS 対応のステップアップ学習 ～ 3 年目の学習プログラムの概要ならびに成果報告～

七川 正一, 山本 英次

要 旨

私たちは看護学科を擁する大学として、豊かな人間性と共に高度な専門性を備えた学生を育成したいと考えている。その 1 つが、救命救急法に関する知識の充実と技術の向上である。平成 17 年度より ACLS に対応できる技術の習得方法の工夫を掲げ、「ACLS 対応のステップアップ学習」と銘打ち、4 年間の学習プログラムを計画した。今回は 3 年目の学習プログラムの概要ならびに成果報告を行う。

1. BLS に関するデモンストレーションの実施

参加した学生全てが全学生および教職員の前で実演したという経験が、「BLS の技術に対する自信」につながったと回答した。また、「手技の再確認や指導時の留意点について考える機会になった」という意見が多く、本実演が手技獲得等に有効に作用したと考えられる。

2. トリアージ講演会について

講演に関して好印象を持つ者が 93.3% と大半を占め、それに付随するようにトリアージに対する理解度も高いものとなった。また、救急や災害看護に関する興味も、講演前と比較すると 93.2% が増したと回答した。これらのことは、BLS に引き続き実施される ACLS に対する意欲向上にも大きく影響するものと考えられた。

3. 集団救急訓練への参加について

ほとんど全ての者が上記 2 の講演会での内容が「役に立った」と回答した。また、他職種の共働することの重要性や救助を待つ負傷者の心境を体験する機会になり、看護学生として災害看護に対する理解が深まったものと考えられる。

キーワード：ACLS, BLS, AED, 指導者, 災害看護

はじめに

私たちは看護学科を擁する大学として、豊かな人間性と共に高度な専門性を備えた学生を育成したいと考えている。その 1 つが、救命救急法に関する知識の充実と技術の向上である。平成 17 年度より ACLS (advanced cardiovascular life support: 二次救命処置 以下, ACLS とする) に対応できる技術の習得方法の工夫を掲げ、「ACLS 対応のステップアップ学習」と銘打ち、4 年間の学習を計画した。これまでに AED (Automated External Defibrillator: 自動体外式除細動器 以下, AED とする) の使用を含む BLS (basic life support: 一次救命処置 以下, BLS とする) や気管挿管に関する講義、演習を通してその技術習得を目標に活動してきた。平成 19 年度はさらなる BLS の技術を高めることや災害などの緊急性の高い場面における行動の基礎となると考えられる企画を実施した。今回はその概要ならびに成果報告を行う。

平成 19 年度における「ACLS 対応のステップアップ学習」の概要

平成 19 年度は以下の事を中心に実施した。

1. 平成 19 年度は BLS を全学的に普及させることを目的に、他学科学生にも指導する機会を設け、自らは学びを深める。
2. 本学科では、クリティカルケア科目における集大成として災害看護に注目しており、とくに災害等の初期行動のあり方について学ぶことを 1 つの目標としている。その際、外部の特別講師の協力も計画している。

言葉の定義

本稿における BLS とは AED の使用法を含めた心肺蘇生法と定義する。

平成 19 年度の実際

平成 17 年度入学生を主な対象として以下の事を実施した。なお、質問紙調査を行なう際は、質問紙の主旨、回答の自由、プライバシー保護の尊重について説明し同意を得た。

1. BLS を全学的に普及させることを目的としたデモンストレーションの実施
本学では「さまざまな自主活動を通して学生間の交流

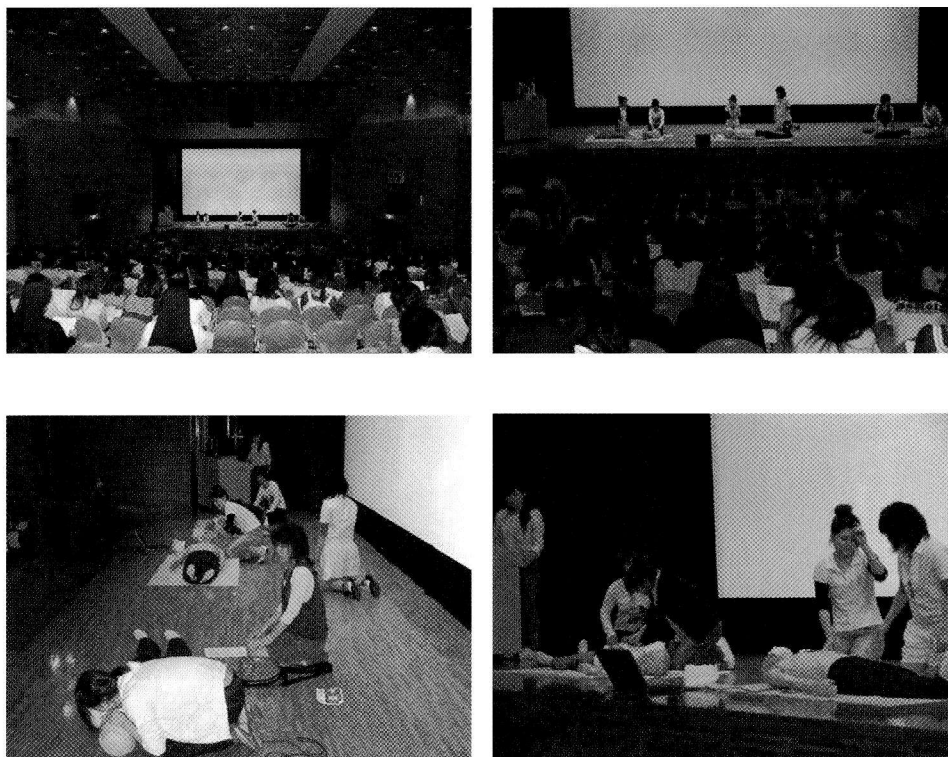


図 1 全学生を対象にした BLS についてのデモンストレーション実施時の様子



図 2 トリアージ講演会の様子

を深め、大学生活を有意義にする」等の目標のもと全学生を対象に「アセンブリー」という時間を週 1 コマ設けている。その中の防災訓練の時間の一部を使用して、平成 17 年度入学生の代表 7 名が全学生を対象に BLS についてのデモンストレーションを実施した。実施に際して救急蘇生法の指針《2005》¹⁾を参考に BLS に関する資料を作成し、全学生に配布した。デモンストレーションの様子を図 1 に示す。デモンストレーション終了後、対象学生に質問紙調査を行った。

2. トリアージ講演会の開催

本学科では、クリティカルケア科目における集大成として災害看護に注目しており、とくに災害等の初期行動のあり方について学ぶことを 1 つの目標としている。その目的達成のために外部の特別講師の協力を得、看護学科の学生を対象に「トリアージ」というテーマにて、ト

リアージの基本的な考え方や災害時のトリアージ等についての講演会を実施した。その際の様子を図 2 に示す。講演会終了後、対象学生に質問紙調査を行った。

3. 集団救急訓練への参加

平成 17 年度入学生 19 名が地元 S 市消防局の呼びかけによる集団救急訓練に参加した。当該訓練はマイクロバスとトラックの衝突事故を想定したものであり、本学科学生以外に S 市消防局や医師会の医師、看護師等が参加した。その様子を図 3 に示す。集団救急訓練終了後、対象学生に質問紙調査を行った。

補助授業の成果・考察

1. BLS を全学的に普及させることを目的としたデモンストレーション参加について

「今回の経験は自分自身の BLS 技術に対する自信の変



図3 集団救急訓練参加時の様子

化に役立ちましたか」という設問に対し、参加した学生全てが「BLSの技術に対する自信にかなり役立った」と回答した。その理由として、「実施に先立ち何度も繰り返し練習したから」との回答が多かった。また、「手技の再確認や指導時の留意点について考える機会になった」という意見が多く、本実演が手技獲得等に有効に作用したと考えられる。またこのことは板垣等²⁾が学生にBLS講習会のインストラクターを務めさせた研究において、インストラクター経験回数が多いほど自信度が高く、インストラクター経験回数と自信の度合いの間およびインストラクター経験回数と筆記試験との間に有意な相関を認めたと報告していることと一部符合するものと考えられる。以上のことより、今後も様々な機会を通して学生がBLSに関する技術および知識が提供できる場を設けていくことが重要になると考える。

「今後もBLS等を指導する機会があったら参加したいですか」という設問に対し、「参加したい」と回答した者が大半を占めた。その理由として「今以上に自信がつくだろうから」、「指導することで自分も良く理解できるし、もっと身につけたいと思ったから」、「もっと多くの人に心肺蘇生について知ってもらいたいと思う」との回答を得た。このことは、今まで実施してきたBLSや気管挿管等の救命処置に関する各種技術が学生にとって身近で自信を与えるものになりつつあることを示唆するものと考えられた。

2. トリアーージ講演会について

今回の講演に対して好印象を持つ者が93.3%と大半を占め、それに付随するようにトリアーージに対する理解度も高いものとなった。また、救急や災害看護に関する興味も、講演前と比較すると93.2%の者が増加したと回答した。加えて、BLSに引き続き実施されるACLSに対する意欲向上にも大きく影響し、現段階よりも技術向上を望む者が94.3%を占めた。自由記述では「看護師として働く以上、トリアーージや災害看護のときに適切な対応ができなくてはならないので、本日の講義を機にもっと学習を深めたいと思った」等のトリアーージ時の基本的な技術の向上に関する事柄に加え、「事故などの災害の現場で人手が足りなかったために適切な医療が受けられず、亡くなる方、また悲しむ家族の方が多いということが分かり、少しでもそのような場に遭遇したときに、一人でも多くの方の役に立ちたいと思った」、「自分が将来、看護師として、どこかの場で働いた場合、命という責任、人間として生きる意味など様々なことを考えると思う。そのとき、本日の講義の中にあつた看護の心を忘れないということを思い出して過ごそうと思った」、「自分の家族を重ねると、やはり看護職者としてだけではなく、一人の人間として特別な思いが込み上げてくる。そのためトリアーージ現場でいかに失礼のないような、暖かく迅速な行動・言動がとれるか今のうちから考えていきたい」、「家族を亡くされた遺族の方々へのグリーフケアも大切であることが分かった」などの災害時

における対象者の精神ケアに関する記述も多く見られた。以上のことより本公演は豊かな人間性と共に高度な専門性を備えた学生を育成するという目標達成の一助になるものと考えられ、災害などの緊急性の高い場面における行動力と冷静さそしてリーダーシップを発揮する能力養成の第一歩となると推測された。

3. 集団救急訓練への参加について

上記の講演から約3ヶ月後、S市消防局の呼びかけによる集団救急訓練に平成17年度入学生19名が参加した。

参加したほとんど全ての者が上記2の講演会での内容が「役に立った」と回答している。その理由として「災害時に行われるトリアージ等のイメージができていた」との回答がほとんどであり、上述の講演が有効に作用しているものと考えられた。

自由記述ではトリアージの重要性に関するものに加えて、「災害現場ではそれぞれの役割を素早く行うことが大切だと思った」、「消防士、救命救急士や医療チームの係におどろいた」等の役割遂行・連携に関するものがみられた。また、「救助隊の方々の声掛けはとても安心した」、「救助されるまでの時間が長く感じられた」、「心理的サポートも重要であると思った（声掛け、何分後にまた来ますなどの目標・約束など）」、「救助を待つ人の気持ちを考えることができた」等の負傷者の気持ちの理解に関するものがみられた。負傷者の気持ちの理解に関

しては実際に救助者の支援を受ける体験をすることが重要であり先行文献^{3, 4, 5)}と一致するものと考えられた。

上記のことより、訓練とはいえ他職種の共動することの重要性や救助を待つ負傷者の心境を体験する機会になり、看護学生として災害看護に対する理解が深まったものとする。

参考文献

- 1) 日本救急医療財団心肺蘇生法委員会監修：【改定3版】救急蘇生法の指針《2005》市民用・解説編. へるす出版, 2006
- 2) 板垣智巳, 山内亮子, 他4名：講習会のインストラクターを務めることが学習意欲に及ぼす影響について. 救急医療ジャーナル15巻3号, 74-76, 2007
- 3) 岩澤慶子, 木津由美子, 小池啓司：災害発生時の患者受入訓練に参加した学生の模擬患者体験からの学びの分析（第2報）. 自衛隊札幌病院研究年報47巻, 53-57, 2008
- 4) 熊谷久子, 蛭名きえ：看護基礎教育における災害看護教育に関する考察 総合病院の災害訓練に参加した学生の学びから. 日本災害看護学会誌8巻3号, 31-39, 2007
- 5) 池田智子, 杉山恵子, 他2名：災害トリアージ演習における看護学生の体験からみた学習効果. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要4号, 36-44, 2008